

# 馬込便り

日本聖公会東京教区 大森聖アグネス教会

Since 1920



Anglican Episcopal Church

## 247号

2024年7月28日発行

編集・印刷:

馬込便り編集グループ

日本聖公会 東京教区 大森聖アグネス教会

管理牧師 司祭 シモン・ペテロ 上田憲明

〒143-0025 東京都大田区南馬込 1-58-8

Tel&Fax (03) 3771-3459

Eメール: [agnes.tko@nssk.org](mailto:agnes.tko@nssk.org)

ホームページ: [www.nssk.org/tokyo/church/oomori/](http://www.nssk.org/tokyo/church/oomori/)



### \*巻頭言\*

管理牧師…

司祭 シモン・ペテロ 上田憲明

《わたしはここにいます》

旧約聖書の出エジプト記三章で、モーセに神さまが出会い、エジプトへ行って奴隷になっているイスラエルの民を解放するというミツシヨンを託される時に、神さまが名乗る名前は、かつての聖書では、「わたしは有つて有る者」と訳されています。そこから、非常に深遠な哲学的議論や神学的議論が導き出されたものでした。しかし、ここでは、前後の文脈を読む中で導き出される意味の方が遙かにリアリティが感じられると私は思います。

エジプトに限らず、古代の社会では、奴隷になるということは、その人が神様から見捨てられているとか、あるいは、奴隷の祈りを聞く神さまなどいないとか、と考えられていたようです。そしてモーセが託されたミツシヨンからわかる事は、そのどちらでもないという神さまからの答えだったのでないでしょうか。神さまが見捨てているという考え方に對しては、奴隷にされている人たちが

の「叫び声を聞き、その痛みを知つた」(出エジプト記三・七)と神さまはおっしゃられる。ハラハラするほどの思いで、彼らのことを見ておられ、辛い叫び声に耳を傾けておられることが告げられています。それはモーセが若い時からずっと気に掛かっていたにも関わらず、それがきっかけで人を殺してしまうことになってしまい、逃げてきたモーセにとつては、どうしようもないと諦め、心の奥底にしまい込んでいた事でもありました。もう一つの奴隷の祈りを聞く神様などいるのか、という問いに對する答として、「神はモーセに『私はある。わたしはあるという者だ。』と現代の新共同訳聖書も聖書教会訳聖書も訳しています。それは、名乗っているというよりは、奴隷の祈りを聞く神がここにいますよ、と神様が熱い思いで訴えかけているかのようなです。これは現代的な感覚で言うと、まさに、「神も仏もあるものか」という絶望の淵に立たされた人に対する神さまからの呼びかけのような答えです。そういう人にこそ聞いてほしい、「私はい、私はい、私はい」と神さまは語りかけておられるということ。

苦しみや嘆きの淵にいる人に答え

ようとする神さま。その神さまが、また人間に呼び掛ける、「わたしと一緒に、その苦しみに、その嘆きに答えてくれる人はいないのか?」と。モーセをはじめ聖書に出てくる人々は、長い歴史の中で、まさにその神様の呼び掛けに答えようとした人たちの姿が多く記されています。そして、その人たちは、こう答えています。「わたしはここにいます」と。

しかし、その一方で、厳しい現実を目の前にした時、そんな事を自分ができるはずがない「無力感」も同時に起こってきます。多くの人がどこか、目の前にいる一人の人さえ、どうにもできない、いや自分自身さえ、どうにもできない自分であることを痛感します。不思議なことに、神さまはそういう無力感を感じている人を用いようとするのです。その無力感は、神さまからの使命を行なっていく時に、神さまと一緒にでなければ、何もできないことを絶えず思い起こさせてくれるものだからなのでしょう。

